台無し

時本　了

中学生の頃、僕はいじめられていた。

きっかけは思い出せない。

だけど、その内容はよく覚えている。

使っていた教科書ノートはもれなく隠され、見つけたと思ったら落書きされ、消したと思ったら破られた。下駄箱に牛乳が染みた雑巾を入れることは出来ても画鋲は置けない程度の度胸の奴らに弱虫だと言われ、もちろん他の悪口も言われた。あざができない程度に暴力を振られた。ないことばかりを噂された。わざと無視された。

僕は生きながら、死んでいた。

しかし、そんな日々は突如、終わりを迎えた。

一人の男子に助けられたのだ。

名前は、鷹崎マサヨシという。

鷹崎君は色んな意味で派手な生徒だった。金色に染まった髪はぼさぼさに伸びており、そのせいで普段は目が隠れて見えていないほど。しかし、実際に見えた時には思わず目を逸らしてしまうほどの鋭利な目を光らせ、上履きのかかとを踏みながら、ポケットに手を入れて、いつも廊下を闊歩していた。

一見、いじめる側にも思える容姿をしている鷹崎君であるが、実際の所、彼は彼自身が自負するほどに正義感の強い人であった。

だから、僕を助けただけではその活動は終わらなかった。僕に留まらず、いじめ現場を見つければすぐさま駆けつけ、多くの生徒をいじめから救っていたのだ。

その度、いじめっ子を睨みつけながら、開口一番に必ず言っていた言葉がある。

「人を見下すのは楽しいか？」

これが決め台詞のようで、当時の僕は、そのクサいセリフをクサいと思わない程度には鷹崎君がカッコよく見えていた。その後は決まって、いじめっ子が素直に謝るまで、鷹崎君は立ち向かっていた。

そうして、いつからだろうか、いじめを解決するヒーローとして鷹崎君の名前は学校中に知られていったのだった。

鷹崎君は純粋にいじめから生徒を救いたかっただけのようで、助けてもらった後は、僕と特に関わることはなかった。しかし僕はこそこそと彼を探し回っては、生徒を守り、いじめっ子に果敢に立ち向かうその姿を遠巻きに見るたびに、まるで勧善懲悪のヒーローアニメを毎週熱心に見る小学生のように興奮していた。

要するに、僕は鷹崎君を尊敬していたのだ。

だから中学を卒業し、鷹崎君が僕とは違う高校に行ってしまったと知った時、陰ながら悲しんでいた。

今、彼はどうしているのだろうか。

僕のことは覚えていなくてもいい。

ただ単純に、お礼を言いたいのだ。

ふと、そう思ったのが現在、高校二年生。期末テストも終わり、夏休みまであと数日。後に残っているのは終業式という、校長の説法を小一時間ほど聞かされるしょ

うもないイベントだけだ。学校をズル休みするのは少し気が引けるけれど、蛇に足が何本も生えているこの期間を利用するしか鷹崎君に会うタイミングはないように思えた。

それに、鷹崎君のことを考えると胸がじわじわと熱くなり、何をしても許されるような心地になったのだ。

そういう訳で、七月のじっとりとした暑さの中、わずかな緊張とわくわくと興奮に包まれつつ、僕は鷹崎君が進学した高校へと足を進めた。

後悔した。

＊　＊

校門を抜けて最初に見える、少し黄色がかかった白い校舎。無数の下駄箱が並ぶ昇降口に鷹崎君は佇んでいた。

ただ最初は、それが鷹崎君であると頭によぎることすらなかった。

容姿が激変していた。

鋭かった目はぱちりと開き、黒縁の眼鏡を掛け、髪の長さは眉毛に届かない所までで、それもきっちり揃えられていた。ポケットにも手を突っ込んではなく、もちろん上履きのかかとを踏んでもない。びっしりと制服に身を包んでいた。優等生だと言われても差し支えない容姿をしていたのだ。

当然僕は気付かずに、その横を通り過ぎようとした。しかし、不意に見えた彼の上履き、その表面に端正な字で「鷹崎」という熟語が並んでいるのがいけなかった。仮に元の名前が「田中」や「高橋」というありふれたものなら僕はたとえ名前が一致していても気に留めることがなかっただろう。

結局、何とはなしの好奇心につられて、僕は男子生徒に話しかけていた。

「あのー、すみません」

男子生徒はいきなり話しかけられたからか、こちらに振り返ると、ぱちくりとまばたきをした。

「何でしょうか？」

「えっと、間違っていたらごめんなさい。あなた、鷹崎マサヨシ君ですか？」

怪訝な顔をしながら、あっさりと答えた。

「そうですけど……君、誰です？」

「え……」

自分から訊いといて、やはり心の中では鷹崎君ではないだろうと高を括っていたのか。

身体が硬直し、思わず声が上ずる。

「……ぼ、僕は！　中学生の頃、あなたに……」

助けられたことがあるんです！

……そう言いかけた瞬間。

目の前にあるロッカー式の下駄箱、その中段の扉が開いていることに気付いた。

扉の上には名前が書いてある。

「鷹崎正義」と。

その文字を見た途端、なんだか頭に突っかかるような違和感を覚える。

しかし、そんなものはすぐに吹き飛んだ。

下駄箱の中身が見えたからだ。

そこには登下校用の黒靴があって。

その靴の中が。

何故か、金色に鈍く光っていた。

いや「何故か」ではない。

そんな簡単な理由、僕は知っているはずだ。

唖然とした様子の僕を見て、鷹崎君は慌てて扉を閉め直す。

そして、誤魔化すように笑った。

「今の……見えちゃったか？」

かつてヒーローだった鷹崎君がいじめられていると知ったのはこの時だった。

＊　＊

鷹崎君を見つけられたのは偶然で、本来ならば運が良いと喜んでいたことだろう。しかし、鷹崎君の上履きに画鋲が仕込まれていたという事実を前にしては、むしろ悪運だとしか思えなかった。

あの後、「場所を変えよう」という彼の言葉によって、僕たちは近所の公園へと移動した。移動する間に僕は、中学の頃、鷹崎君にいじめから助けてもらったことがあること、そのお礼を言いに来たことを一方的にまくし立てた。気を遣ってくれたのか、単に僕のことを覚えてい

なかったのか。その間、僕に対して特に指摘することはなく、鷹崎君はひたすら相槌を繰り返すだけであった。
公園に着くと、鷹崎君は無言で近くのベンチに座る。僕も重い足を引きずるように歩き、その隣へ。
少し離れたところから聞こえてくるのは、ブランコで遊ぶ小学生のはしゃぎ声。その純真無垢な姿を場違いな気持ちで目に収めながら、僕はようやく本題を口にした。
「……どうして変わってしまったんですか？」
数秒の沈黙の後、返ってきた言葉は、
「何が？」
「何がって……！」
今更はぐらかせるとでも思っているのか、と言ってやりたい衝動に駆られる。しかし、鷹崎君の真剣な顔つきを見やり、僕は口を半開きにしたまま固まった。
彼は分かっていてそれを訊いているのだ。
僕はなんとか気持ちを抑え、目を伏せた。
「まず……見た目」
「えーっと、……確か、こんな感じだっけか？」
鷹崎君は眼鏡を外し、まぶたを少し閉じてこちらに見せてくる。
昔の自分を再現したのだろうけれど。
僕はかぶりを振った。
「全然違う。……そもそも髪の長さが足りてない」
「あー、そっか、そうだ。確かに彼の髪はもっと長かった」
……彼？　彼って誰？
そんな疑問を口に出す前に、
「ほら、コレ」
鷹崎君はスマホを取り出すと、フリック操作をし、こちらにその画面を見せてきた。
映っていたのは、とあるキャラクターの画像だった。金髪をぼさぼさに伸ばし、目が隠れている。
ただ、前髪に垣間見える目は鋭くて……。
まさか。
思わず鷹崎君の方を見ると、彼は自嘲気味に笑った。
「お恥ずかしながら、このキャラクターに憧れてたんだよ。結構マイナーだったから、誰からもそれを指摘されたことはなかったけど」
「……嘘、でしょ」
頭が真っ白になる。
視界が揺れて、何が何だか分からない。
……じゃあ、あなたが僕を助けてくれたのも、多くの人をいじめから救っていたのも、全部……
「全部、ただ憧れていた偶像の真似をしてただけだって言うのか！」
僕の悲痛な叫びにも動じず、鷹崎君は自嘲的な笑みを浮かべ続け、
「そうだったら、どれほど良かったことか」
なんとも落ち着いた声で言い返した。その不思議な気迫に圧倒されて、僕は続く言葉を失う。
代わりに今度は空々しい陽気な声が聞こえてきた。
「これ以上みじめな気持ちになりたくないから、言いたくなかった。だけど、話すよ、全部」

＊　＊

俺は小学生の頃、父親から虐待されていた。殴る、蹴るは当たり前。あざがいくつできたかなんて覚えていない。飯も父親が食い散らかして放置されたパンをたまに食べられれば健康的な食事だった。
だけど、俺がなにより一番辛かったのは母親が父親によって一方的暴力を振られている様を目の前でまざまざと見せつけられていたことだ。
「お前もこうなりたくなかったら、俺の言うことを聞くんだな！」
酒臭い息を吐きながらそんな馬鹿なことをのたまっている父親の姿を見て、絶対にこんな人間になるものか！と、俺は心の中で誓った。
そんな中、唯一心の休まりになったのはとあるアニメを見ていた時。そう、さっき君に見せたキャラクターのアニメだ。
あらすじは至極シンプル。極悪非道な悪人によって殺されそうになる沢山の村人。そこへ颯爽と現れたヒーローが村人をクールに救い、悪人を倒す。これだけだ。
これ以上ないほどハッキリとした勧善懲悪の物語を俺はいつも食い入るように見ていた。
結局、父親の独裁政治は、耐えきれなくなった母親の通報によってあっけなく幕を閉じた。
ただ、人を見下しいじめるような、最低な人間を絶対に許してはいけない……そんな決意のみが俺の心に染みついていた。

＊　＊

そこで一旦言葉を切ると、鷹崎君は自分を落ち着かせるように深呼吸した。
対する僕は拍子抜けしていた。

自然と口元が緩む。
なんだ、全然感動的な話じゃないか。むしろただただ偶像の真似をしているのではなく、鷹崎君自身がちゃんといじめを許せないと考えていたことを知れて、安心したほどだ。
ほっとする僕。
ふいに隣を見ると、鷹崎が憐れむような表情で僕を見つめていた。
その表情のまま、僕に問いかけた。
「念のため確認するけど……どうする？」
「どうするって……何を？」
「この話の続きを聞くのか？」
「聞くに決まってるよ」
僕は呑気に答える。
鷹崎君の顔は変わらない。
「……君は、君自身が今、本質的に何をしようとしているのか分かってないだろ」
「それは、鷹崎君が変わってしまった理由を問い詰めているだけじゃ……」
「ほら、分かってない」
そこで初めて、鷹崎君は僕を小馬鹿にするように笑った。その薄い笑みに何故か既視感を感じて、ぶるりと寒気を感じる。瞬間、冷たいような熱いような声が鷹崎君の口から飛び出した。
「問い詰めるだって？　お前にそんな権利がどこにあるんだ？　お前はただ、俺に身勝手な理想を押し付けていただけじゃないか。俺が偶像に憧れていたって言った時、お前はあからさまに失望したような顔をしていた。つまりお前は俺の気持ちなんかどうでもよくて、自分自身を肯定させたかっただけなんだ。俺が深い意義と志を持って、他人を救っていたはず、そうであってほしい、そうでなければ、自分が助けられたことの価値がなくなってしまう、と。お前だって、俺を偶像に見立てていたんだ」
叫んだのか、言い放ったのか、とにかく言い終えると、鷹崎君はそんな自分を戒めるように顔を抑えた。
そして続けて、ぽつりと言った。
「……それでも、俺は誰かの偶像になれていることを嬉しく感じていた。だからこそ、偶像が崩れたと知られてしまった今、その理由を説明する責任が俺にはあると思う。だから、訊いているんだ」
……そうだ。僕は何を勘違いしていたんだ。
鷹崎君はもう、偶像じゃない。
ここから僕が望む結末になんて、なる訳がないんだ。
僕はこれから——
「俺はこれから、君をさらに失望させるだろう。……そこで、君はどうするんだ？　このまま話を終わらせて俺を偶像のままにしておきたいのか、それとも、その先を知りたいのか？」
「ぼ、僕は……」
声が震える。
何があって、鷹崎君はいじめを救う活動をやめてしまったのか。
そして、なぜ彼は今、いじめられているのか。
それを聞くのが、知るのが、怖い。
怖い……けど。
聞かなかったら、絶対に僕は後悔する。
そしてこれから一生そのことに怯えることになるだろう。
今の自分があるのは、鷹崎君のおかげだと素直に思えなくなってしまうのは。
それだけは、嫌だ。
声を出そうとするが、僕の声は掠れていた。喉がカラカラに渇いていた。潤すために唾液を溜めて、喉に通す。どろりと異物が入ってくるような感覚が吐きそうなほど気持ち悪い。
それを無理やり飲み込むと、僕は絞り出すように言った。
「聞かせてよ、最後まで」
「……分かった」

＊　＊

父親の虐待からの解放と憧れの偶像が出来たことで、俺はいじめを撲滅したいと考えるようになり、それを実際に行った。
それが、俺の中学時代だった。
君も知っての通り、そこで俺は、俺が思うままに、君を含め多くの生徒をいじめから救い、やがて学校新聞にも報じられ、どんどん名が知られていった。
そしていつしか、俺はヒーローに祭り上げられていた。
あの時は、本当に幸せだった。
だから俺は、中学を卒業して、高校に入ってもこの活動を続けた。
……続けるべきじゃなかった。
俺は気づかされたのだ。
自分が行っていたことの間違いに。
あれは、去年、高校一年のちょうど今頃。
とある二年生の女子生徒Ａからいじめの相談を受け

た。話によると、Aが当時一年生の時からクラスの生徒、三人組からずっといじめられ、学年が二年に上がり、クラスが変わった今でも現状は変わらず、いじめられ続けているという。

「無視をしてきます。何を言っても聞こえないフリをしてくるんです。悪口も言ってきます。気持ち悪いから近づくな、って。物も隠してきます。教科書を隠され、無くされて、どこかへ行きました。他にも数えきれないほどのいじめを受けました。……どうしたら、良いのでしょうか！！」

ハンカチを涙で湿らせながら話すAを見て俺は、「ああ、コイツは嘘をついていない」と確信した。

俺は怒りに打ち震えながら、すぐさまその三人組に詰問しに行った。

「彼女がお前らにいじめられていると言っているがそれは本当か？」

そう問いかけた瞬間、彼らは必死の形相でそれを否定していた。

ああ、またこのパターンか、と俺は思った。

えてして、本当にいじめてる奴ほど問いかけた直後、すぐ必死に否定するのだ。全く身に覚えがない場合、普通はまず、困惑が先に出るはずなのだ。

そんな教訓を中学からの経験で得ていた俺は、彼らの中身のない否定を信じず、正直に白状するまで責め立て続けた。

……最終的に、彼らは全てを白状した。

しかし、その内容はAが訴えていた話とは全くもって噛み合っていなかったのだ。

なぜか。……結論から言うと、Aの訴えた内容は全て、Aの被害妄想だったからだ。

だが、ただそれだけなら俺が謝ればいい。

「冤罪をかけてすみませんでした」ってな。

そう単純な話ではなかったのだ。

さらに遡ること一年、つまり俺がまだ高校受験のため必死に勉強していた頃。

この高校で、とある仲良し四人グループが生まれた。そのグループには同じ中学の人間はおらず、全員高校での初対面から仲良くなっていった。

しかし、その状態は長くは続かなかった。

そのメンバーのうちの一人が変だということに他の三人が気づいてしまったからだ。

ソイツは一見、常識人の優等生に見えた。

だが実際は妄想癖が酷く、ことあるごとにストーリーを脳内で作り上げて、それを本気で信じ込むような変わった人間であった。それが、Aだった。

話し合いの末、三人はそっとAから離れていこうという結論を導き出した。Aが話しかけようと近づいてきたら、何かと理由をつけて別のところへ逃げ、また、遊びの誘いもしないようにした。

つまるところ、ハブったのだ。

しかし、Aはそれに全く気づかず、変わらず接してくる。三人は我慢できず、キツく対応することにした。

曖昧に拒否するのではなくはっきりと「やめろ」、「気持ちが悪いから近づくな」と言うようにしたのだ。

普通の人間ならば、流石にそこで諦めるだろう。

「ああ、自分は嫌われているんだな。もう近づくのはやめよう」と。

つまり、それでも気づかず、近づくのをやめなかったAは妄想癖だけでなくストーカー気質もあったということだろう。そしてそのまま一年が経った時、無視され続けるAの精神的キャパシティが限界になり、俺に相談してきたというオチだった。

……なあ、これって誰が悪いんだろうな。

一見、Aが全て悪いように思える。だが、Aは嘘をついていないし、悪気もないのだ。だって、実際に無視はされている。「気持ち悪い」「嫌いだ」という言葉も悪口と言えなくもない。物を隠された、というのも自分が無くしたものを三人がやったと思い込んだだけだ。

被害妄想とは言え、AはAなりに悩んで俺に相談をして来たのだ。

「いじめは、いじめられた側がそれをいじめだと感じた時点でいじめである」

いじめの境界線として、よく唱えられるこの主張に従うならば、悪いのは三人ということになるのだ。

しかしもちろん三人も、異常者であるAを近づけさせたくなくてやっただけの正当防衛だ。

本人達からしてみればただただ、Aが迷惑だったに過ぎない。本人達にいじめているつもりはない。

果たして、どっちが悪いのだろう……。

……なんてな。

俺が言いたいのはこんな禅問答じゃない。

こんなものは、そこらへんの心理カウンセラーにでも哲学者にでも任せればいい。

問題なのは、そういったことを全く想像せず、三人が悪いと瞬時にキッパリと断言した当時の俺自身にある。

「そんなの言い訳だ」

と、俺は一蹴し、三人をひたすら責め続けた。

そんな俺自身に気づいた時、俺は俺がやっている行動に疑問を持ち始めたのさ。

なんで、あの時俺は、三人が悪いと一方的に決めつけ

たのだろうか、と。
もう少し深く考えても良かったんじゃないだろうか。そうすれば本人たちに聞かされる前にその複雑な事情を察することが出来たんじゃないか、と。
だがいくら考えてもその疑問は解けなかった。
だから俺は自分で解決するのではなく、他人に任せることにしようと思った。具体的には、いじめている生徒を見つけたら、それを先生に相談するという方法。
自分が正しいか分からなくなった今、そんな他人任せの方法に変えるしかない、と。
そう思って。
そう、思った、瞬間。
体から熱がスッと消えていった。
まるでいきなり冷水を浴びせられたような心地。
これを形容できる言葉を俺は探し、それはすぐに見つかった。
「興味がなくなった」のだ。
他人を救うということに。
その時、さっきの疑問がストンと解けた。
何故、俺は頑なに三人が悪いと決めつけたのか。
何故、俺はずっといじめっ子を責め続けたのか。
――俺は、人を救いたかったわけじゃない。
――悪い奴を、いじめたかったのだ。
俺が一番楽しかったのは、いじめから他人を救った時でも、それを感謝される時でも、もちろん偶像の真似事をした時でもない。
正論を盾にして、相手を一方的に責め立てる時、そんな俺に対して相手が恐怖する顔を見せた時、最高潮に快感が湧き出てくるのだ。
振り返れば、全てが腑に落ちた。
俺が好きだったアニメ。
一番熱心に見てたシーンはヒーローが村人を救う所なんかではなく、ヒーローが一切の慈悲を見せずに悪人を裁いている所だった。
よく考えればおかしかった。どうして俺はどこにでもあるような勧善懲悪の物語にあれほど心酔したのか。
あの物語では悪人を容赦なく殺していたからだ。他の物語は子供向けだからか、悪人を懲らしめる程度で終わっていたから好きになれなかったのだ。
――なんでもっと残酷にやり返さないのだろう。
そんな気持ち悪い憎悪に満ちた疑問を持って、ずっと悶々としていた。
いじめられている現場を見て、俺が怒り狂ったのは、被害者が可哀想だったからじゃない。
父親への憎しみを悪人に背負わせて、勝手に復讐していただけなんだ。
「そして、何より最悪なのは」
鷹崎君はある一点を睨みつける。
その先には、親子がいた。
膝の上に子供を乗せながら、滑り台をつるつると滑っている父親の姿。そんな微笑ましい光景を見て、鷹崎君は拳を握り締めた。
「俺は父親のようにはなるものかとずっと思っていた。それが、俺のアイデンティティであり、プライドであり、絶対防衛線だった。だからこそ、他人をいじめる人間を許せないと思ってこれまでいじめ撲滅に向けて活動してきた。だが、実際はその活動自体が、父親がやっていたことと本質的に同じだったのさ！　俺は知らず知らずの内に、あれだけ嫌っていた父親になっていたのだ。人を見下し、いじめるような最低な人間に。父親の血はちゃんと俺に流れていやがったんだ！」
叫び、わなわなと肩を震わせる鷹崎君。
そして、それは僕も同じだった。
目の前の偶像がガラガラと音を立てて崩れていく。
僕は必死に手を伸ばした。
「ち、違う！　鷹崎君はそんな人じゃ……」
「違わない。俺は最低な人間だ」
崩れていく。
「きっと鷹崎君は人を助け続けることに疲れているだけなんだ！　そ、そうだ！　とりあえず休んで、落ち着いてから考え直せば……」
「もうやった。何も変わらなかった」
崩れていく。
「信じてた、のに」
「……悪い」
崩れていった。
僕は泣いた。
泣いている間、鷹崎君は僕の背中を身勝手にさすった。

＊　＊

「……なんで、今、鷹崎君はいじめられているの？」
泣き腫らした目で僕はまだ知ってしまっていない真実を訊く。
案外怖くはなかった。これ以上傷つく気がしなかったのだ。鷹崎君は何でもない事のようにさらりと語った。

「今の俺に、いじめを救い続けるなんて出来るわけがない。すぐに活動をやめた。あのダサい格好もやめて、今は優等生のフリ。結果、元々ヒーローぶっていた俺に対して反感を持っていた生徒が、今がチャンスだとばかりにいじめにきているのさ」
「抵抗は、しないんですか？」
なんと返されるのかは、なんとなくわかっていた。
案の定、鷹崎君はきっぱりと言った。
「しない。これは俺が今まで行ってきた偽善に対する罰だ。だから、甘んじて受け入れなければいけない」
「そんなこと……」
僕は何か慰めの言葉を言おうと口を開いた。
……その瞬間。

「罰」

その単語を聞いた瞬間、天地がひっくり返った感覚が僕を襲うと同時に。
なんだ、これは。
とある文字が頭に流れ込んできた。

――鷹崎正義。

「おい、どうした。そんなに顔色を悪くして」
――渾身のカッコつけに対して、私が何の反応を示さなかったからか、不満に感じた鷹崎から指摘の声が飛んでくる……。
……って、な、何を言っているんだ僕は。
カッコつけ？　不満？
鷹崎君がそんなつもりで言っているわけないじゃないか。僕を心配してくれてるんだろ。
一体、僕の頭はどうしてしまったんだ。
「大丈夫か、おい！」
肩を揺すられる。
鷹崎君の顔が見える。
口が朦朧に動いた。
「……セイギ、君」
「な、なんだよ、いきなり。懐かしいな」
照れているような、困惑しているような表情。
「懐かしい……？」
「分かっていて言ったんじゃないのか？」
かぶりを振ると鷹崎君はため息混じりに説明した。
「俺の中学時代のあだ名だよ。学校中の生徒から、俺の活動を誉め称える意味で、下の名前の正義から読み方を変えて『セイギ君』っていうあだ名で呼ばれてたんだよ。それも今となっては黒歴史だけどな。……それよりも大丈夫か？」
もう一度肩を揺すられ、ようやく僕ははっとした。
霞がかかっていたような意識が不意にクリアになる。
「あ、ああ。ごめん、考え事してた。大丈夫だよ」
「何を考えていたら、そんな顔色悪くなるんだよ、全く」
苦笑する鷹崎君。
僕も必死に苦笑いを浮かべていた。

＊　＊

どのくらい話しただろうか。
時計を見ると、針はちょうど十八時を指し示していた。
それから十秒ほど遅れて、夕方を示すチャイムが流れる。公園でチャイムを聞くなんて、いつぶりだろうか。
チャイムに伴って、親子は手を繋ぎ、子供たちは追いかけっこをしながら帰っていく。その光景を見て、ノスタルジックな気分に浸りかけてる僕を覚ますように隣から声が聞こえた。
「さて、俺も帰るか」
言いながら、鷹崎君はベンチから腰を上げる。
「僕も……」
「無理するなよ。お前、今の俺と一緒にいたくないだろ？」
鷹崎君はいじらしく笑った。
僕は座り込んだまま、何も答えることが出来ない。
そう、確かに今僕は鷹崎君に失望し、嫌いになりかけている。でも……それでも、何かを伝え忘れているような、そんな気がするのだ。
気付けば、鷹崎君はもうこちらに背を向けて歩き出していた。このまま、鷹崎君はいじめられながらも普通の生徒に戻り、僕も平穏な日常を過ごしていく。
そんな、そんな程度で終わっていいのだろうか。
……いや、終わらせてやるものか！
僕はよくわからない感情が赴くままに遠ざかる背中に叫んだ。
「鷹崎君！！」
顔をこちらに振り向かせる。
その表情だけで「まだ何か？」と、問いかけられた。
それに腹が立って、僕はより一層強く叫ぶ。
「どんな残酷な真実があっても、僕は、あなたに救われたんだ。いや、僕だけじゃない！　少しの例外はあれ

ど、多くの人はあなたに救われている！　さっき君も言っていたじゃないか、自分には人を救った責任があるって！　だから……だから！　その責任を取って欲しい！」
「……俺の気持ちを考えないでか？」
興奮した僕の声に反して鷹崎君の声は鋭利なナイフのように冷たかった。
僕は構わず言い返す。
「そうだ！　あなたは今、諦めようとしているんだ！　本当の自分は最低な人間なんだって。最低な父親と何も変わってなかったんだって。だったら、変わってなかったなら、今、変わればいいじゃないか！　本当のヒーローとして！」
鷹崎君の心が少し動いたようだった。
眉がピクリと動き、口元を手で抑える。
やがて手を外したと思うと、それでも鷹崎君は反論した。でも、その声色には熱が入っていた。
「勝手な事を言うな！　変われって言われても、そんな簡単に出来るわけないだろ！　仮にもう一度やり直すとしても、俺はこれから一生、誰かを救うたび、責めるたびに、『今、自分は他人をいじめているのではないか』という疑念に苛まれることになるんだぞ。その苦痛に耐えていけって言うのか！」
「なら……」
僕は一つ、これ以上ないほど大きな深呼吸をして、自身を落ち着かせる。
そして、鷹崎君の目をまっすぐ見据えて言った。
「変われないんだったら、変わらなくても良いと思う」
「な、何を言ってるんだ？　お前は、俺に偽善をしろって言うつもりか！」
不意にネットで聞いた名言を思い出した。
僕はにやりと笑った。
「……やらない善より、やる偽善」
「はあ？」
怪訝な顔をしている鷹崎君と顔を見合わせる。
再度、僕は叫んだ。
「やらない善より、やる偽善だ！」
ほとんど睨み合うかのように、顔を見合わせ続ける。
数秒後。
最初は口からふすっと少しの息が漏れ出ただけだった。
しかしその波はどんどん広がり、気付けば。
「あはははは！！」
僕たちは呼吸が出来なくなるほど、大笑いしていた。
ひとしきり笑った後、鷹崎君は晴れ渡った笑顔で言ってくれた。
「……まあ、考えとくよ」

＊　＊

鷹崎君が去った後、僕はベンチに座ったまま、今の自分の行動を振り返っていた。なんとも清々しい気持ちだ。
……これで、もしかしたら鷹崎君は皆のヒーローとして復活してくれるかもしれない。
ああ、良かったなあホントに。
勇気を振り絞って、本当に……。
良か、った……。
……勇気？
言い得ぬ違和感。
思い出す。
あの時、自分に湧いてきた気力。
その根源を。
あれは、本当に勇気だったのか？
勇気とは、恐怖に耐え、立ち向かうための力だ。
あの時、そもそも僕に恐怖なんてあったのか？
いや、恐怖じゃなくても、躊躇するようなマイナスな感情なんてあったのか？
そんなもの、ない。
僕は反射的に動いていた。
まるで、これからやるべきことが既に分かっていたかのように……。
おかしい。何かが噛み合わない。
そもそもいつだ。
いつ僕はおかしくなった？
……そうだ、あの時だ。
鷹崎君から「罰」という単語を聞いた時。
何故か混乱して、その後、いきなり鷹崎君のフルネームが思い浮かんだんだ。
鷹崎正義。
――セイギ君。
ふと、疑問が生まれた。
鷹崎君は言っていた。
「セイギ君」は、中学時代のあだ名。
学校中の生徒からそう呼ばれていた、と。
――じゃあ、なんで僕はセイギ君のことをずっと、「鷹崎君」と呼んでいたのだろうか？
なんとなく気恥ずかしかったから？
違う。そもそも、そんなあだ名、僕の頭には浮かんでいなかったのだ。
「セイギ君」なんてあだ名は完全に忘れていたのだ。

逆に言えば、忘れるほど、僕は中学時代、そのあだ名で彼を呼んでいなかったのだ。
でも、別に人の呼び方なんて人それぞれ。
学校中の生徒が「セイギ君」と呼ぼうとも全く問題は……学校中の生徒？
新たな疑問が、疑惑が、脳を侵食する。
――そもそもなんで、学校中の生徒が知っているほど、「セイギ君」の活動が広まり、持て囃されているのだろうか？
「セイギ君」のいじめ撲滅活動で救われるのは、当然、いじめられている生徒だけだ。しかし、鷹崎君の話によると、「学校中の生徒」から活動を称賛されていたらしい。僕の記憶でも、学年に関わらず、いつも多くの人間に囲まれている鷹崎君の姿があった。
だとするなら。
全く関係のない、彼に助けられたことのない普通の生徒も彼の行動を褒め称え、偶像として信仰していた、ということになる。
それは、奇妙だ。
想像してみる。
もし、同じ学校にいじめ撲滅活動をしている生徒がいたと知ったら、普通の人はどう思うだろうか。
「ねえねえ、この学校にいじめから生徒を救うヒーローがいるんだって」
「ふーん、そうなんだあ。凄い善人なんだね、その人は。まあ私たちには関係ないけど」
これで終わっているはずだ。
せいぜい、雑談のネタに利用される程度。
わざわざそんな変人に近づこうなんて考える人は滅多にいないだろう。
しかし実際は、中学時代、分け隔てなく彼を信仰する人間が溢れていた。
やはり、おかしい。僕の感覚と事態が全く正反対だ。
僕は鷹崎君を信仰しているはずなのに、「セイギ君」と呼んだことがない。
そこまで有名になりえないのに、鷹崎君の名前は学校中に轟いていた。
その理由を確かめる方法はないのか？
……そうだ。一つだけある。
学校新聞に報じられ、有名になった、と彼は言っていた。学校新聞を読めば何かがわかるかもしれない。
僕はベンチから立ち上がると、すぐさま自宅へ向かって歩き出した。もうすっかり日は落ちており、空は薄暗い雲に覆われ始めている。近くの街灯には光を求めて多くの蛾がまとわりついていた。

＊　＊

自宅に着くとすぐさま自分の部屋に行った。
目の前には、中学時代の思い出が残されているであろう押し入れ。大きく深呼吸をする。
……なんで僕はこんなことをしているのだろうか。
もう鷹崎君の話は終わったじゃないか。
これ以上過去を調べて何が変わるっていうのだ。
まさか、この期に及んでまだ希望を求めているのか。
本当は、鷹崎君は善人なんじゃないか、なんて。
……だとしたら、僕はなんて情けない奴なんだ。
そんな自己嫌悪に苛まれながらも、取っ手に手をかける。
だが、手に力が入らない。
ぶるぶると震えては掴んだり離したりを繰り返す。何度目かの試行の後、不意に力が入り、間違えて扉を開けてしまった。開けてしまったものは、もう、戻せない。
ぱっくりと開いた闇の中へと頭を突っ込んだ。普段全く掃除をしていないからか、その中はむせかえるほどに埃臭い。あれでもないこれでもないと物色すること数分。
表面に「中学」と書かれた段ボール箱を見つける。
取り出し、恐る恐る開く。中には、中学生の時に使っていた教科書の他に、ずっしりとした大きな白いファイルが入っていた。ファイルに挟まっていたのは沢山のプリント。だが、それは数学だったり国語だったり学校だよりだったりと、統一性がない。当時の自分の杜撰さに呆れながらめくり、だからこそ「学校新聞」という文字が突如視界に現れた瞬間、まるでびっくり箱を開けた時のように心臓がドキリとした。日付を見ると、どうやら僕が中学三年生であり、その九月頃に書かれた記事のようだ。ちょうど文化祭の時期だったようで、記事にはでかでかと各組の出し物に対するインタビューが書かれている。
流石にここにはセイギ君に関する話は書かれてないか。
そもそも学校新聞に紹介されたのだって一度きりかもしれない。
そう思いながら読んだのが間違いだった。
ある部分に思わず目を見張る。
新聞の一番下、その一コマにこんな見出しがあった。
「お手柄！　セイギ君、今日もいじめを救う！」
――その先は、まさに地獄だった。
いじめが引き起こされた原因、すなわち他人の事情に

無関係な奴らが首を突っ込み、それを脚色して大袈裟に報じる。可哀想な被害者と残虐なる犯人。そんな構図が一方的に作られていた。
そして一番酷かったのは、セイギ君の信仰具合だ。
どのような経緯でいじめに気づき、犯人を追い詰め、被害者を助けたのか、推理小説仕立てのストーリー。
解決後のセイギ君へのヒーローインタビュー。
吐きそうなほどの勧善懲悪な物語がそこにはあった。
この記事の存在だけが異質だ。文化祭のインタビューが大部分を占める中、明らかにおかしな何かがねじ込まれている。
そう、これは……歪んだ善意だ。
歪んだ善意によって、事件が、悲劇として学校中の生徒たちに消費されている。
読者にとって、「セイギ君」は物語の主人公。
それは面白い読み物であり、娯楽なのだ。
それだけではない。
被害者、犯人の名前が晒されているのだ。
この後、新聞の読者たちが何を行うかなんてのは容易に分かる。
これでもかと罵詈雑言の嵐で犯人を責める。
そうして、今度は他でもない読者たちによって犯人がいじめられるのだ。
これは妄想ではない。
着実に中学時代の記憶が呼び起こされている。
次に僕がやることは、もちろん決まっていた。
ファイルをめくり続けて、他の新聞を探したのだ。
今見たものを信じたくない。
そんな一心で探し、すぐにその希望は打ち砕かれた。
セイギ君。セイギ君。セイギ君。セイギ君。セイギ君。セイギ君。セイギ君。セイギ君。セイギ君。セイギ君。
どの号であろうとも、どんな大事な行事があろうとも、必ず入っている文字列。
そして何十枚目かも分からない紙屑を読んだ時。
――私は全てを思い出した。
なぜなら、その被害者の欄には。
「佐藤詩音」
私の名前が、載っていたからだ。

＊　＊

中学生の頃、私はいじめられていた。
きっかけは女子のくせに一人称が「僕」だったことだ。
その内容もよく覚えている。
使っていた教科書ノートはもれなく隠され、見つけたと思ったら落書きされ、消したと思ったら破られた。
下駄箱に牛乳が染みた雑巾を入れることは出来ても画鋲は置けない程度の度胸の奴らに弱虫だと言われ、もちろん他の悪口も言われた。無視された。あざができない程度に暴力を振られた。あることないこと噂された。私は生きながら、死んでいた。
けれど。
仲間外れには、されなかった。
私は、死にながらも生かされていたのだ。
しかし、そんな日々は突如終わりを迎えた。
一人の男子が頼んでもいないのに勝手に助けやがったのだ。
名前は鷹崎正義という。
鷹崎は色んな意味で愚かな人間だった。
何かのキャラクターを真似しているのか、痛々しい恰好をして、いつも廊下を闊歩していた。
鷹崎は多くの生徒を一方的に助けていたが、実際のところ、あいつはあいつ自身が自覚していないほどまでに清々しい偽善者だった。
他人の事情に首を突っ込んでは、何も言い返せないことを良いことに悪い奴を一方的に責め立てるような最低な奴だった。そしてそんな奴を慕っている人間が大半だから始末に負えない。
私の時もそうだった。
確かに私はいじめられていた。
苦しんでいた。
けれど、そのおかげで他人から相手にされていたのだ。
一人称だけじゃない。
私はいろいろおかしかった。
そんな変人にもいじめっ子たちは「いじめ」というコミュニケーションを取ってくれていたのだ。
それなのに、鷹崎はすべてぶち壊した。

「人を見下すのは楽しいか？」

笑えてくる。

本当に皮肉な決め台詞だ。

そう言っている自分が見下しているということに気づいていないのが、最高に滑稽だ。

鷹崎が見下し終わり、満足すると、今度は新聞部がそれを美談のように書き散らした。

結果、いじめっ子は他の生徒にいじめられ、私をいじめてくれなくなる。

するとどうだろう！

誰も私に関わらなくなるのだ。

あるのはいじめの被害者に対する憐憫の眼差しだけ。

散々いじめっ子たちを責め尽くしたくせに私には何もしてくれない。

周囲の人間はどうしようもないほど読者だった。

鷹崎は悪人を責め立てたいだけのようでその目的が達成されると私は用済みなのか、やりたい放題やって前以上に浮いている私をそのまま放置。何が責任だ。

結局その日以降、私は最後まで孤独だった。

ただ、私はこそこそと鷹崎を探し回っては、いじめっ子をいじめ、暗い快楽に浸るその姿を遠巻きに見るたびにまるで勧善懲悪のヒーローアニメを毎週熱心に見る小学生のように興奮していた。

要するに、私は鷹崎を憎んでいたのだ。

だから中学を卒業し、鷹崎が私とは違う高校に行ってしまったと知った時、陰ながら悲しんでいた。

今、あいつはどうしているだろうか。

私のことは覚えていなくてもいい。

ただ、単純に復讐をしたいのだ。

ずっとそう思い続け現在、高校二年生。

その間、あいつに復讐する材料はたくさん集めてきた。

私以外にも鷹崎に助けられたことを憎んでいる人間がいること。

読者たちにいじめられた人間の中に不登校になっている人間、果ては自殺した人間がいること。

そういった真実をすべて突き付けて、あいつを絶望させてやるつもりだった。

それなのに。

あいつは自力で気付きやがったのだ。

自分がどれだけ残酷な行いをしていたのか、その片鱗に。

それを知ったとき、私は激高した。

ふざけるな！

私がこれまで準備してきたことは何だったんだ。

この程度で私の復讐は終わらせるものか。

もう一度あいつを元の「ヒーロー気取りの勘違い男」に改心させなければならない。

その為に、私は「僕」を作ったのだ。

「セイギ君を偶像崇拝する生徒」という虚像を作り上げ、私自身にそれを思い込ませたのだ。

「鷹崎を改心させる」という目的だけを吹き込んで。

普通はそんな芸当出来ないだろう。だが私にはそれが、出来た。出来たからこそ、私はおかしい。

そうして準備を整えた私は、高校の制服のレプリカをこれまで蓄積した伝手から借り、こっそり侵入したのだ。

鷹崎正義に「セイギ君」に戻ってもらうために。

＊　＊

その翌日、私はもう一度学校へ行った。

果たして鷹崎は「セイギ君」に復活しているのか。

計画は成功しているのか。

これほどまでに緊張していたことがかつてあっただろうか。じわりと出てくる冷や汗をハンカチで拭う。

昔から使っているゼラニウム柄のお気に入りのハンカチ。私は気合を入れるようにハンカチをぎゅっと握り占めた。

……大丈夫だ。

計画は成功している。

その確信は、ある。

私が鷹崎を引き留め、説得した時、あいつ手で抑えつつも確かに口元をにやつかせていた。

待ってましたと言わんばかりに嬉しそうに。

私が過去の失敗を肯定することを期待していた証拠だ。

だから、大丈夫だ。

そう言い聞かせ。

そして、目撃した。

胸倉を掴んで怒鳴り散らしている「セイギ君」の姿を。

私は口元を歪めた。

「やらない善よりやる偽善」は、ある一面から見れば確かに正しいのかもしれない。

だが、あいつの行っていることはそもそも偽善ですらない。

ただの悪だ。

それに気づかず、あいつは私のそれっぽい感動的な台詞にまんまと騙されている。

ああ、なんて気持ちいいのだ。

あいつはこれからずっと人を見下し続けるだろう。

これは偽善なんだと開き直りながら。

そして、私はそんなあいつを見て。

――盛大に見下してやるのだ。